

埋 藏 文 化 財 調 查
報 告 書

旧 石 器 遺 跡

昭和53年9月

東利尻町教育委員会

昭和51年度において実施した埋蔵文化財調査の結果、旧石器遺跡が発見され、その分布状況の調査を本年度実施した。この報告書は、その主任調査員である岡田淳子先生の報告書を全文紹介し報告書とするものであります。

栄町 A 遺跡の試掘に関する報告書

1) 調査の要約

昭和53年7月27から8月5日まで、3名の調査員と約10名の補助員とで試掘調査を実施した。先年遺物を採集した地点を中心に、沢と直交するトレンチを設定し、これを拡げるように、2M×2Mの試掘こう(グリッド)を発掘する方法をとった。試掘こうは笹原のなかも含めて20箇所に通じ、遺跡のほとんどをカバーしたと思われる。

なお、沢の下流に土器の散布する地点があるので、その付近も一部試掘した。

2) 調査結果の要約

1) 旧石器時代の文化層を発掘層序のなかに確認することは出来なかった。表面採集によって細石刀 (micro blade) および彫刻刀 (荒屋型graver) が発見されているので、かつてその時期の文化層があったことは間違いない。森林組合の田中氏によれば、発掘地点一帯は苗圃にする際、ブルドーザーで土をならし、残土はキャンプ場の北西側に押したという。

発掘調査の所見によれば、遺物を表面採集した地点には、かつて段差があり、平らにするため1M余を削り取ったことが知られた。文化層はこの段差の台上にあり、ほとんどが削り取られてしまったものと思われる。

2) 表土の黒色土層と、黄か色の火山灰層の間にある漸移層のなかに石組遺構と十数点の遺物を発見した。石組遺構は長径約1.5Mの円形プランで、周囲の石は立てられ内側の石は敷かれたように並んでいる特徴的なものである。遺物は、石器を作る際に打ち欠かれた剥片と、薄い小形な土器片で、時期をあらわす特徴を備えていない。同類の遺構・遺物の発見をまつか、土壌の分析(有機物に含まれる放射性炭素の測定)をしなければ、絶体年代を求めることは難しいであろう。

3) 沢の下流地点の発掘で、黒色土層のなかから石鏃・オホーツク式土器の底部を含む多数の遺物を発見した。オホーツク文化の遺跡は海岸に近く占地されるここが一般的なので、これだけ海をはなれて発見されるのは珍しいと思われる。

栄町C遺跡と名付け、同町の埋蔵文化財包蔵地に加えたい。

3) 今後の課題

ノボリオマナイ沢の流域には、かつて少なくとも三時期の遺跡があったことが明らかになった。道北には数少ない、そして島では唯一と思われる旧石器時代の遺跡は、残念にも壊滅してしまっただけで、わずかに残った数箇の石器は貴重な証拠として大切に保管したい。他の二時期の遺跡については、まだ未知な部分が多いが、現在は保存がおびやかされることもないので、機会をみて追いつ追いつ説明されることが望ましい。

調査期間中、鷺泊港から市街地にのぼる道道の工事中の崖面に竪穴住居址の断面を確認した。これはベシ岬A遺跡の一部と思われ、当遺跡で住居址が確認されたのははじめてである。オホーツク文化の前半（刻文期）に属する住居で、その上層にはオホーツク文化後半の貝層も認められた。当遺跡は大部分が破壊され残存部分は少ないと思われるので、保存対策がなされるとよいと思う。

1978 9.5. 岡田 記